



## 葛 根 湯

葛根湯は、傷寒・金匱に出ており「太陽病、脈浮、頭項強痛シテ悪寒ス」という症候があって項背強（僧帽筋領域の緊張）で、首筋が几几（キキ、あるいはシュシュ=突っ張った感じ）になる。そして汗はなく、悪風する者に与える。あるいは、太陽・陽明の合病の場合、必ず自下利（下痢）する。こういう場合に葛根湯を与えるわけです。

雑病として金匱要略に「太陽病で汗が出ず、しかも（反ッテ）小便が少なく、氣上衝（異常感覚が上の方に突上がってくる）、そして口噤語ルコトヲ得ズ、剛瘕ヲナサント欲ス」金匱では、瘕病（引きつるような症状）の虚実について、剛瘕が実、柔瘕が虚と区別され、柔瘕には瓜呂桂枝湯を与えると記載があります。いずれにしても、葛根湯は、この条文に従って応用していきます。

よく、葛根湯は桂枝湯に葛根・麻黄が入った処方と考えられていますが、正確には桂枝湯の桂枝・芍薬の量を減らした上で、葛根・麻黄が入っていることを理解しておきたいと思います。

葛根湯の君薬は葛根で、葛根には動物実験で解熱作用が証明されています。注目すべきは、動物が正常な状態では解熱作用は発揮されず、発熱させた状態ではじめて解熱作用が発揮されます。メカニズムは、皮膚血管の拡張（血流増加）により、体表より熱の放出と呼吸運動の促進によって気管支より水分排出を促進させることによって体温を低下させます。また、冠動脈拡張作用も認められています。その意味で、バゾプレッシンなどによるラットの急性心筋虚血に拮抗、あるいは脳血量の増加により頭痛・眩暈他の治療につながります。また、イソフラボンには鎮瘕作用があって、腸管の収縮作用に拮抗します（パパベリン作用）。生薬のおもしろいのは、イソフラボン類と相反した腸管収縮作用もあるんです。これは、副交感神経刺激作用で、Kassein .R といった成分も分析されています。その意味では、葛根から抽出したこれらの物質は、腹部膨満感や胆道ディスクネジーその他にも応用されています。

このように葛根の作用は多岐にわたり、臨床的に急性熱性疾患のファーストチョイスになるかと思いますが、それ以外にも、頭痛・頭重感あるいは慢性副鼻腔炎、時には高血圧症、また、血の道症といわれる更年期障害、さらには処方集の適応には載ってませんが、膜痛・湿疹、顔面神経マヒ、三叉神経痛と非常に多方面に効果のある薬方です。これは項背強・「気胸=上衝」といった反応、「項背強ばる～腰痛の引きつれ」など、幅広く活用できます。

カゼの患者さんを診察した場合、傷寒（急性熱性疾患）としては、桂枝湯、葛根湯、麻黄湯を考えますが、これを気血水の観点で見ますと、「気」は桂枝湯、「血」は葛根湯、そして「水滯」には麻黄湯となります。「肩こり」、つまり「こり」は血証ですから、葛根湯の適応です。舌所見からみますと、カゼの初期には大した変化はないといわれています。しかし「初期」はいつかは難しいですね。今年（2021年）、コロナの予防接種をしましたときにハッと気づきました。そう、接種=感染なんですね。初期というのは、接種した直後を意味します。それは大した変化はないですね。一般的には「昨日からかぜ気味で・・・」で来院されます。それでも、ご本人は「初期」なのかも知れません。しかし、もう2～3日は過ぎてますから、少し厚い白苔がついていることが多いです。ここは、桂枝湯、麻黄湯でも同じですが、葛根湯の目標には、舌尖部が紅色を呈してきます。さらに、茸状乳頭が目立つ（紅点といいます）ようになると、少陽の証が出てきたわけですから、柴胡剤（小柴胡湯、柴胡桂枝湯）を与えることとなります。インフルエンザはじめ、攻撃性の強いウイルス疾患で高熱が続く場合には、太陽・陽明の合病として柴葛解肌湯（さいかつげきとう）（葛根湯エキスと小柴胡湯加桔梗石膏エキスを合方します）をお出しします（新型コロナウイルス感染症に対しては治験が東洋医学会主導で進行中です～2021年）。本当に幅広く使えます。